学 会 名	日本看護研究学会 第49回学術集会(2023) （ 2023年8月19日～20日）
研究テーマ	回復期リハビリテーション病棟における･入院時のせん妄アセスメントの検証
病 院 名	医療法人社団 健育会 竹川病院
演 者	○発表者 岸本恵美 （看護師） 共同研究者 大森正雄（看護師）共同研究者 清田照美（看護師）

概 要

【研究背景】
回復期リハビリテーション病棟（以下、回リハ病棟）へ転院当日のせん妄発症が見られるが、回リハ病棟でのせん妄発症率は明らかにされていない。回リハ病棟における発症率と発症リスク要因を明らかにすることでせん妄アセスメント及び予防的なケアに活用できると考えた。

【研究目的】
回リハ病棟入院時におけるせん妄発症率と日本語版ニーチャム混乱・錯乱状態スケール（以下、J-NCS）のボーダーラインが一般病床入院時と同様に26点以下か検証する。また、どのような危険因子が関連しているかを検証する。

【研究方法】
1.仮説検証研究
2.研究場所・対象 ：A病院回リハ病棟に入院した患者250名
3.データ収集方法：入院日に全患者に対してJ-NCSと独自に作成したせん妄観察シートを評価
4.データ収集期間：2022年1月～8月
5.分析方法：せん妄発症群と非発症群に分類し、統計解析した。

【結果】
回リハ病棟でのせん妄発症率は9.2%であった。ｔ検定ではせん妄発症群と非発症群で年齢、FIM、J-NCSに有意差がみられた。Mann-Whitney検定では認知症高齢者日常生活自立度に有意差がみられた。χ2検定では前医での抑制、せん妄の既往、回リハ病棟入院後のセンサー使用、認知症の診断、向精神薬の服用、抗認知症薬の服用、オムツ使用による精神的侵襲で有意差がみられた。

【考察】
1.粟生田ら1）は認知症やせん妄の既往と薬物に関連があると述べており、直接因子としての向精神病薬を服用している患者は急性期のせん妄既往の可能性が示唆された。
2.準備因子としてのせん妄発症と認知症の診断は、入院後のせん妄発症と関連があると考えられた。
3.誘発因子としてのオムツでの排泄は、羞恥心を与え自尊心を低下させる等の精神的侵襲が大きい。これは、せん妄について大きなストレスが重なって発症する一種の不適応行動として捉える2）と竹内が述べていることと本研究結果が合致した。
4.回リハ病棟でのせん妄発症リスクのボーダーラインはJ-NCS25点と考えられ、一般病床入院患者のJ-NCS26点より低いことが明らかになった。

【結論】
1.回リハ病棟の,せん妄発症率は9.2%であり、一般病床を退院し状態安定後も,せん妄発症のリスクがある.
2.回リハ病棟でのせん妄発症リスクのボーダーラインはJ-NCS25点と考える
3.11項目の要因が関連し、せん妄を発症しており、前医と連携し入院時アセスメントを確実に行うことで、せん妄の予防的なケアに繋がる可能性がある

【引用文献】
1）粟生田友子,長谷川真澄ら.一般病院に入院する高齢者患者のせん妄発症と環境およびケア因子との関連.老年看護学12巻1号.2007
2）竹内登美子.高齢者のせん妄アセスメントとせん妄ケアのアルゴリズム開発に向けて.富山大医学会誌.19巻1号,2008